

狭くて条件の悪い京都の坪庭は「和の庭」のお手本になるでしょう



長い歴史と伝統に培われ、御所や離宮・数々の寺院に名庭を持つ京都。ここで代々造園業を営む庭師・津田秀夫さんに、日本の庭の真髄を語っていただき、美しい「和の庭」をつくる心得と狭さや悪条件を克服する工夫を教えてくださいました。



つだ ひでお
津田 秀夫
昭和22年生まれ。
東京農業大学農学部造園学科卒業後、(株)武蔵野造園土木を経て(株)植清・津田造園入社。平成元年同社代表取締役任に。平成16年、京都府優秀技能者「現代の名工」受賞。現在、(社)京都府造園建設業協会理事。京都府造園協同組合副理事長。

※(株)植清・津田造園は明治11年4月創業。京都府より「京の老舗」として表彰された造園業の老舗。津田さんが5代目となる。

1) 枯山水・かれさんすい
室町時代に入ってきた宋・明の山水画の影響で、水を用いず、地形によって山水を表す庭。石組を主として、水を表すのに砂や砂利が使われます。

2) 露地・ろじ
茶室に付属する庭。茶庭。つくばい+燈籠+待合い腰掛け+飛び石などを配置します。

3) 坪庭・つぼにわ
屋敷内の庭園。中庭。露地。

4) 白川砂・しらかわすな
京都市左京区北白川で産出する花崗岩が白川石。白地に黒色の錆を帯び、石燈籠・手水鉢などに用います。白川砂は枯山水の池や川に使われます。

伝統的な京の町屋が生んだ「坪庭」

私のところでは、御所・離宮の庭、寺院の庭、個人住宅のお客様の庭、それに公園とか街路といった公共施設などを手がけています。離宮や寺院の仕事が多いのは、京都ならではのですね。個人の庭もほとんどが和風ですが、バリエーションはいろいろで、池を掘る広い庭もあれば、枯山水(注1)の庭もある。茶道関係では露地(注2)(茶庭のこと)もありますし、小さな坪庭もあります。

京都の伝統的な町屋は、表庭がほとんどなくて、前の道路いっぱいには塀をつくり、すぐに建物があって、それが奥まで長く続き、中に坪庭(注3)がある。いわゆる「うなぎの寝床」で、それが基本的な建築様式です。中の庭は、建物に囲まれていますから、狭く日当たりも風通しも悪い。でも京都人は、そんな悪条件であっても、そこで耐えられる植物を選び、四季を感じさせる庭をつくって愛でてきたんです。



数寄屋造りの住まいに合わせて設計した庭。数寄屋建築に欠かせない京都洛北産の北山杉を、柱だけでなく、植栽でも使用しています。(左奥に数本並ぶ細い木)

苔むした燈籠に“わび・さび”の心が

和の庭とひと口にいても、日本全国同じではなく、京都には独特の美意識があります。地方では新しい庭には新しい燈籠を入れるのが当たり前ですが、京都は違います。まさならものをそのまま使わず、新しくても古く見せるのです。うちの庭には10年20年経った燈籠やつくばいがゴロゴロ置いてありますが、これはみな商品で、雨風に打たれ、錆びて苔むしてくるのを待つんです。それを使って庭をつくると「あ、前からあるんやな。歴史のある庭なんやな」という印象を与えられるわけです。京都にはそういう、古びたものを尊ぶ“わび・さび”の精神があります。

以前、京都大学で教鞭をとっていたイギリス人の女性が、本国に燈籠を送りたいということで、うちに話が来たんです。そこで苔むした燈籠を選んだところ、彼女が「このモス(苔)を取り除いてほしい」と言うのです。私は「待ってください。われわれ京都の造園屋はこれを値打ちとしているんです」と答えました。「あちらに着いてから取るのは貴方の自由ですが、うちは苔を着けたまま送りますよ」とね。結局彼女は文化を理解してくれたようで、あとで写真を送ってくれましたが、燈籠は苔むしたままでした(笑)。

適材適所・創意工夫が京都の庭

日本庭園というと、1本何十万の木とか、1本何百万の燈籠とか、1個何百万の石とか、そういう話題ばかりが先行する場合があります。しかし、豪華な材料を使ったからいい庭ができるかというと、そうでもありません。高価な素材を集めたとして、庭そのものが良い庭かといえば、そうとは限らないのです。京都の庭は、必ずしも高い素材を使いません。それよりも、それぞれの素材やデザインをいかに組み合わせるか、そのバランスを何よりも大事にしているんです。要は適材適所であり、組み合わせの妙で、そこに工夫を凝らすことが「粋」なのです。

また、地方などで広いスペースが十分に取れる場合、「定型の庭」というのがあって、手前は何も置かずにダーンと空けるんです。で、枯山水なり池なりをつくって、奥のほうに立派な木を何本か植える。しかしこういう配置はあくまでも広い日本庭園のもの。都市部の限られたスペースの土地に小さな和の庭をつくりたい、という場合の参考にはなりません。そこで、昔から悪条件下で坪庭などをつくってきた京都の庭造りの「創意工夫」がお役に立てるのではないのでしょうか。

具体的にどんな工夫があるか……ということは、下の「実践編」でお話ししましょう。

実践編

「和の庭」づくりの創意工夫を教わる

Q1 狭い庭を広く見せるには？

A. 遠近法を利用したり、アプローチをS字に曲げたりして、奥行きを感じさせましょう

昔から狭いところを広く見せる工夫はたくさんありました。龍安寺の石庭は、さほど広くないのに永遠の広がりを感じますね。実はあの庭を囲う塀は、手前が高く、奥に行くにつれ少しずつ低くなっているんです。それで、パッと見た瞬間スッと奥行きが深く感じられる。たとえば右の写真は個人宅の枯山水の庭ですが、水に見立てた白川砂(注4)の流れを、手前は広くし、奥のほうは細くしました。そうすると目の錯覚で遠近感が生まれて、「どこまであるんやろ」というふうにも奥深く見えるわけです。

また、アプローチをS字形に曲げる。直線ならわずかな距離なのに、くねくねと曲線にすると何倍にも長い距離に感じられます(中の写真)。木で遠近感を出すやり方もあります。建物のきわに大きめの木を植えると、手前の大きな木越しに後ろの景色を見るため、木の向こうの景色が小さく見えて遠近感が生まれ、狭い庭でも奥行きを感じることができるようなんです(左の写真)。



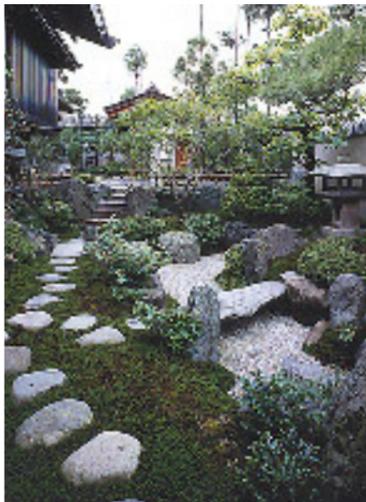
右手前に植えたサルスベリの木が、狭い庭に遠近感をもたらしています。



S字型に曲げ、距離感を出したアプローチ。鉄平石の乱張りが情趣を添えています。



寺院の庭の枯山水。右奥の川の流れる手前より細く、そのため奥深く感じられます。



建物が民芸調なので、あえてあまり庭木に使わない柏の木を植え、素朴感を出しました。松や楓など高価な植栽よりも適材適所が大切。